

解答

問一 (第二段落) 一・二年生
(第三段落) 今、目の前

問二 「会う」は、相手と顔を合わせてたがいの存在を認め合う」とだが、「見かける」は、一方が相手の姿を認めるだけ、という違いがある。

問三 不潔でだらしない身なりのためクラスのみんなに嫌われているさつちゃんの三人の姿に、「ぐくぶつうの幸せそうな印象を受け、さけられることを恐れたから。

問四 障害があるらしい両親とみつともない外見のさつちゃんの三人の姿に、「ぐくぶつうの幸せそうな印象を受け、心ひかれたから。

問五 障害があり、何をやつても手がかかる長谷川くんを大きらいと言いながらも、自分の気持ちに正直で、優しき「ぼく」の人柄が描かれている点。

問六 『はせがわくんきらいや』の「悲しくておもしろい」と、「読み聞かせた一年生たちも感動したことがわかり、うれしかった。

① 訪 ② 景勝 ③ 街 ④ 游 ⑤ 旅路

解説

問一 出典は、華恵『本を読むわたし』。

問一 場面分けの問題です。設問の「四年生の『わたし』」のことが書かれているか、それよりも前のことが書かれているかに注目して分けたとき」という条件に沿って解答しましょう。書き出しから4行め「今日は五・六時間目に、四年生が一年生に絵本を読んであげる『読み聞かせ会』がある。この日のために……」とあり、「読み聞かせ会」の日のはじごとが展開しますが、この間に、「わたし」が一・二年生の頃の話が挿入されています。緊張と不安で読み聞かせる時間をむかえた「わたし」ですが、いざ読み始めた時、目の前に座っている女の子に「さつちゃん」の面影を感じ取り、そこから、以前の学校での「さつちゃん」にまつわるエピソードを思い出します。2ページ下段1・2行め「前の学校のこと、さつちゃんのこと、さつちゃんのお父さんとお母さんのことが、いつでも目に浮かんできた」とあり、この直後から具体的な回想場面が始まります。回想場面は5ページ上段18行めまで続きますが、直後の20行めに「今、目の前にいる一年生に、あの時のさつちゃんや友達やわたし自身が重なる」とあり、回想場面が終わつたことがはつきりと読み取れます。

問二 「会う」と「見かける」の違いを説明する問題です。国語辞典で調べれば容易にわかる問題ですが、無論そういうわけにはいきません。傍線部直後からの5行に注目します。まず、「わたしから声をかけることはなかつた。さつちゃんは、いつも自転車で猛スピードで目の前を通り過ぎるだけだったから。」という二文から、「見かけられる」の意味が読み取れます。姿は認めても、そのままやり過ごし、話しかけないこともあるというのです。続く三文では、「さつちゃんは、いつも必死で、無我夢中になつて、自転車をこいでいた。今のわたしだったら、「どこに行くの?」ぐらい聞くと思う。でも、その頃は何も思わなかつたし、関心もなかつた。」とあり、対比的に「会う」ということについて読み取れます。「どこに行くの?」ということくらい話しかけたり、挨拶くらいはしあつたりするというのです。

問三 「ハナエちゃん、きのう楽しかったね」とか「また遊ぼうね」など、みんなのいるところで言われるのがいやだつた——のはなぜでしょうか？ 直接の理由は、3ページ上段11・12行め「女子の中で、さつちゃんと仲良しの

子はいなかつたと思う。わたしも、仲良くしたい、とは思わなかつた。」、3ページ下段9・10行め「みんな断るそ
うだから、わたしも断ればいいや。」から読み取れます。クラスメートたちからよく思われていいなさいさつちゃんと仲
良くすると、自分がクラスメートたちからよく思われないのでないか、という心情です。〔：(A)〕

問四 3ページ上段4～10行め「みんな断るそ
うでは、みんながさつちゃんのことをよく思わないのはどのような理由からでしようか？」

めに「さつちゃんはいつも、口のまわりが汚かつた。ケチャップやソースがついていたり、眠つていた時のよだ
れのあとが白く乾いて残つていた。いつも風邪を引いているみたいに、鼻水が出ているか詰まつてあるかのどつちかだつ
た。」とあり、さつちゃんの不潔でだらしない様子がえがかれています。このようなさつちゃんをみんな嫌つてい
たのです。〔：(B)〕直接の理由(A)と組み合わせて解答をまとめましょう。

問四 『出来事・気持ちの動き→言動』の因果関係を整理する問題です。「わたしは、三人の後ろ姿をずっと目で追
いかけていた」という傍線部の中で、「三人の後ろ姿」が表す意味と、「ずっと目で追いかけていた」という「わた
し」の心情の二点を結びつけて解答します。

し」と「心の二点を結びつけて解答します。

ささらに、「両脇がつちりとお父さんとお母さんに守られていた。さつちゃんよりも、お父さんとお母さんの
方が、嬉しそうだった。」とあり、両親の愛情をしつかりと受けているさつちゃんの姿は、「わたし」にはうらや
ましいものでした。傍線部直後に「……瞬、さつちゃんのことを言おうかどうか迷つた。でも、言わなかつた。
さつきの三人の後ろ姿だけ、頭にこびりついている。わたしは母の左手をぎゅっとつかんだ。」とあります。さつ
ちゃん（仲むつまじい三人の姿）のことを、「わたし」が母親に言えなかつたのはなぜでしょうか？ それは、「わ
たし」が「母の左手をぎゅっとつかんだ」とから推理できます。「わたし」が自分の右手で「母の左手をぎゅつ
とつかん」でも、「わたし」の左手は空いています。つまり、父の存在が欠けているのです。文章中からは詳し
い事情は読み取れませんが、何らかの事情で父親との結びつきが失われていたため、さつちゃんが両親から愛され
ている様子を目の当たりにして、心ひかれたのです。

このように、「心ひかれた」気持ちの中には意外な驚きとうらやましさとが入り交じつていたと考えられます。
「わたしの大好きな場面」は、6ページ上段5～20行めに描かれています。この範囲の「ぼく」の言葉と行動
に注目します。長谷川くんは不慮の事故から障害を負つてしまい、他の子と同じように行動できません。だから
何をやつても手がかかります。「ぼく」はそんな長谷川くんの世話をしていますが、「長谷川くん、だいじょうぶか。
長谷川くん」、「長谷川くんが鉄棒からまっさかさまに落ちると、『ぼく』はバットを投げ出して駆けつける。そ
して、暗い道を、長谷川くんをおぶって歩く。」という部分からは、長谷川くんを心配し、優しく接している「ぼ
く」の姿が読み取れます。そして、そんな優しい行動とは裏腹に、「長谷川くんといっしょにおつたら、しんどう
てかなわんわ。長谷川くんなんかきらいや。大だいだいだあいきらい」という発言で場面が終わっています。
「しんどい」のは実感でしょうが、そんな苦しみ、つらさを言葉で表しながらも長谷川くんの世話をする「ぼく」
の優しい人がらに心ひかれているのです。

問六

「別の感動」を読み通る問題ですが、最初の感動はどうなことによりますか？傍線部を含む文の前半から
読み取れます。「思いがけなく、もらつたカードの枚数が一番多いのはわたしだった。初めは『一番』というの浮
かれていたけれど、……」とあり、読み聞かせ会の評判が最もよかつたことに、浮かれていたのです。

次の「感動」は、感想カードの内容によります。「楽しいんだけど、かなしかつた。でも、さいごはおもしろかつ
た、「かなしかつた。でも、最後はおもしろかつた」——「かなしくておもしろかつた」という内容を何度も読み
返した「わたし」は、「悲しくておもしろい、って、ホントだね。」と共感しています。四年生の自分が抱いた感
想と同じ感想を一年生たちが表したことに対し、好意的に感動したのです。